



市史を読む会の課題 : 尼崎市での経験から (〈特集〉自治体史編さんの現在 : 参加と活用の新しい取り組み)

中村, 光夫

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:38-42

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489533>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489533>



特集 自治体史編さんの現在―参加と活用の新しい取り組み―

市史を読む会の課題

――尼崎市での経験から――

中村 光夫

はじめに

『尼崎市史』を読む会（以下「読む会」と略す）は、平成六年（一九九四）一〇月に市立中央図書館において第一回例会を開いて以来、若干の休止期間を含むものの開始以来三十年後の令和五年（二〇二三）七月に三二二回を数えている。平成二九年開始の北図書館例会もすでに六〇回を迎えている。

開始から令和二年（二〇二〇）九月までは尼崎市立地域研究史料館が担当し、ついで同史料館の市立歴史博物館への再編に伴って地域研究史料室「あまがさきアーカイブズ」が担当する市の事業として現在に至っている。

「読む会」では現在、平成二八年刊行の『たどる調べる尼崎の歴史』をテキストとしているが、本稿については昭和四一

四五年（一九六六～七〇）刊行の『尼崎市史』通史編四冊、平成一九年刊行の『図説尼崎の歴史』（以下、「市史」「図説」と略す）をテキストとし、筆者が運営職員・解説者として関与した令和三年までの二七年間を対象とする。

一 「読む会」の実施と課題

（一）テキストと解説の限界

私が解説者として担当したテキストは、尼崎地域の古代から現代までの通史である「市史」と、時代ごとに地域史に即したテーマについて記述した「図説」の前近代部分である。したがって、市史の史料編をテキストとして行なわれている例とは課題の捉え方が異なるであろう事を了解されたい。

昭和四〇年代後半に刊行された「市史」は、たしかに明治以

降に発行された多くの地誌や地方史誌に比較して、格段に読みやすく編集されている。「高校卒業程度の学力」を前提とした編集であり、学術書と比べて用語も文体も平易なものではある。しかし、内容的には戦後歴史学における社会経済史研究の成果に基づいた記述が中心であり、いわゆる「歴史読み物」とは異なる理解力が必要とされる。「市史」で叙述される具体的な事実、名称・用語のいずれにも、多くの市民が「歴史」を理解する上で手掛かりにするであろう中学校・高校時代の「歴史教科書」レベルの知識を越えるものが含まれる。

まさにその点で「読む会」に解説者が必要なのだが、例会ごとの限定された時間内で史実の紹介、名称・用語の解説をした上で、当日のテキスト部分の内容説明だけでなく地域史における位置づけや研究史的意義まで解説するのは、とうてい無理な相談である。

「読む会」では、例会一回で五〇〇～一〇〇〇頁（字数にして約三万～六万字）分を解説することで始めたが、開始後数回を経ずして一回当りの頁数が多すぎるとの声に参加者から上がった。地域史誌や歴史関係書籍を読み慣れた参加者でさえ、一か月程度の間隔では例会一回分を一通り目を通すだけでもたいへんというものであった。

検討の結果、「市史」の記述のまとまりを考えると頁数を減らすことは難しいので、例会では記述の大きな流れの解説を中

心とし、その部分に関連するテーマでゲストスピーカーの講演・報告を何回か挟む形に落ち着いた。また、例会における名称や用語の説明については必要最小限として、参加者からの質問は「読む会ニュース」で後日回答する形に整理した。

例会の場においては「市史」の記述の解説を中心とし、尼崎地域史における位置づけや参考文献の紹介まで触れることができれば十分と考えるに至った。それは今でも妥当な運営方法だったと考えている。

「特定地域」の通史といえども、各時代ごとにその地域を取り巻いていた諸条件や、歴史の全国的な流れについての基礎的な知識があつてこそ理解できるものであり、そこには解説者の力量が大きく関係する。

尼崎の場合で言えば、通常例会で解説を担当したのは前近代部分が主として筆者であり、近現代部分担当が辻川氏（注）であつた。この二人が解説を基本的に担当することとなつたのは、二人が「市史」史料編と『尼崎地域史辞典』の調査・編集を経験していたからではあるが、「読む会」を始めた当時、尼崎市財政は厳しい緊縮状態にあり、新たな出費を伴う事業は認められ難い状況であつたことも大きい。

注 辻川氏は、昭和五十七年より地域研究史料館に勤務。同館館長を経て、現在は尼崎市立歴史博物館再任用職員。国立公文書館長が認定する認証アーキビストである。

当時の若年職員や嘱託職員も歴史地理や日本史学の学科卒業生であったが、彼らが昼間の通常勤務時間後に開く「読む会」で解説役を勤めると時間外の超過勤務手当が生じた。その点、担当した二人はともに係長職であり、超過勤務手当が不用であったのだ。なお、次に述べるゲストスピーカーも基本的にまったく無償のボランティアで協力していただくこととなったのも、「読む会」をなんとか継続していくための窮余の一策であった。

筆者の場合でいえば、史料館で各種刊行物の編集をすること、で前近代全般を担当した経験があるとは言え、基本的には近世の尼崎地域史が専門である。したがって、一回限りの解説で参加者の深い理解を得られるような解説が出来るとは考えられない。まずは「読む会」への参加によって、それまで接する機会がなかった「市史」への親しみを少しでも感じてもらうのが優先事項であった。

(二) 多様なゲスト講師

筆者が地域研究史料館において長年にわたり尼崎地域の近世関係史料の調査研究・保存に従事してきたとはいえ、古代から中世・近世にわたる通史の解説を務めるのは当然ながら荷が重かった。その負担を一部担い、より専門的な立場からの解説を得られたのが、多様なゲストスピーカーであった。

ゲストスピーカーには「市史」・「図説」の執筆者に止まらず、

地域研究史料館の紀要『地域史研究』に執筆を願った専門研究者や、地域研究史料館に調査来館された方、相談利用者などにも積極的に働きかけ、ご協力を願った。それぞれ多様なテーマを追求する方々であり、会の参加者数も「市史」をテキストとする通常例会より多いくらいであった。

「市史」をテキストとする場合、市民の身近な地域の出来事であり、時代も一定範囲に限られているが、そこで言及される史実は政治・経済・社会など多様な分野にわたる。それぞれの分野はそれぞれの歴史を伴っており、「身近な地域」の歴史のなかで完結しているわけではない。そのような広がりに伴うのが「通史」解説の困難な点である。一方、ゲストの場合は本人が精通し、かつ特定のテーマに関する話であり、聞き手の側でもテーマを把握しやすいものである。

「通史」の解説にそのような困難が伴うならば、整然と完結した叙述に見える「地域の通史」も執筆当時の研究状況や歴史観に制約されたものであり、どのような点に今後見直される可能性があるのかだけでも、「読む会」で常に指摘続ける必要がある。

それだけでも、「読む会」への参加が「地域史について聞き知った」で終わらず、「地域史の変化」への興味を生み出すことにつながるだろう。

(三) 読む会を支えた活動

「読む会」開始の当初から「読む会ニュース」を発行し、開催状況の報告や例会予定の告知をはじめ、例会での参加者からの質問への回答や感想などを掲載した。

質問への回答は、前掲のとおり例会時間の制約上から後日に「ニュース」誌上で行なうこととなったのだが、当日の参加者以外にも質問内容や回答・感想を伝えることが可能となった。これは例会での解説の不足を補うことにより例会参加の継続を促すとともに、新たな参加者を誘導する媒体ともなったとみられる。

今になって振り返ってみると、平成一〇年頃から新尼崎市史としての『図説』編集業務が本格化したのに並行して、「ニュース」へ参加者の質問回答や感想が掲載されることが減少している。そして現在では、「読む会」関係の報告や告知の広報は、あまがさきアーカイブズ²が発信するインターネット上の情報に限られ、会場での質問や参加者の感想、解説者からの回答などは知り得ない。

印刷物としては、市の広報誌である「市報」には「読む会」開始当時から開催情報を掲載してきているが、そこに掲載される事項は日時・会場など最小限度に限られており、新たな参加者へ働きかける要素には不足している。

広報活動の縮小は、担当職員が新尼崎市史事業の開始によって日常の編集事務や史料の調査・収集事務などに手を取られ、「読む会」事業にかけることのできる時間が不足してしまったことが大きな原因である。

かつては、「読む会」に出席する市民の有志に世話人として運営協力を願っていたこともある。「読む会」の参加者拡大と内容の充実を図る上では、有志の運営協力を再び求めることも必要だろう。

歴史博物館に移行してからも解説を担当する職員の業務は拡大しており、市政一般に共通して「市民との協働」が求められているとはいえ、容易には実行しがたい領域であろうが。

(四) 会場と参加者

「読む会」は市立中央図書館を会場として始り、平成二九年以降は市立北図書館でも並行して開かれるようになった。中央図書館は阪神尼崎駅に近く、北図書館は阪急武庫之荘駅に近接している。それぞれ市域の南部と北部にあつて鉄道駅に近いという位置にあつて、尼崎市域の交通網の特徴である東西移動の利便性を「読む会」への参加促進にも生かせる配置である。

しかし、職員の日常業務との関係から「読む会」開催時間を一八時から一九時三〇分の夜間に設定せざるを得なかったとはいえ、参加者の利便性としては問題なかったのだろうか。

夜間の開催としたのには、夜間には図書館行事が少なく、施設の確保が容易であることが大きく働いた。そして、現役の勤め人世代の参加も期待したのであったが、現代の多くの勤め人は夜の六時から自宅近くの図書館へ出向くことは困難なようであった。かえって夕食時間を含む夜間の時間帯では、家事から手の放せない女性や夜間の外出が困難な高齢者世代の参加機会を狭めたとも考えられる。

かつては「読む会」の世話人に運営協力を願っていたこともある。職員の手不足が容易に解消できない状況が続くのならば、市民有志の運営協力を再び求めて昼間時間帯の開催可能性を追求するべきではないだろうか。

二 今後の課題

尼崎市の場合で考えると、阪神間に位置する都市として新旧市民の入れ替わりは激しく、若い世代も増加して来ている。つまり、「市史」に接したことのない市民は常に存在する。したがって、常に新しくテキストを用意する必要はなく、繰り返し「市史」「図説」をテキストとして新たな読者を求め、「読む会」を継続するべきであろう。

また、現歴史博物館紀要『地域史研究』は、昭和四六年（一九七二）に尼崎市史編集室紀要として創刊以来一二二号を

発行しており、尼崎地域の古代から現代にわたる論文・史料紹介など豊富な蓄積がある。「通史」とは異なる素材ではあるが、「読む会」のテキストとして活用しない手はないと思う。「市史」の解説とは異なり、ゲストスピーカーの話に近い解説が可能なのではないだろうか。

博物館への来館者からの働きかけを期待するだけでなく、博物館の職員と市民読者との「読む会」を通しての対話からこそ、新たな地域史の課題や地域史料の新たな利用・保存の方向も見えてくるのではないだろうか。

ところで、筆者は市史編集事業と文書館事業を四〇年以上担当してきたとは言え、今では両方の事業から引退した身である。本稿に記した課題は、現実の博物館の人的構成や業務上の制約を無視したものと思われるかも知れない。しかし、かつては「文化不毛の地」扱いされていた尼崎で「地域文書館」「歴史博物館」が生まれた育ったのだから、「尼崎市民の力」を信じて『市史』を「読む会」の活動を継続して欲しいと願っている。